

## 共通研究主題

# 学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成する カリキュラム・マネジメント

主題研究部（研究主任 竹島 潤）

### 1 はじめに

本校では、これまで「主体的な学習者」の育成を目標に、学習内容の価値の自覚を中心とする課題設定の工夫や、小グループを中心とした課題解決的な学習活動（いわゆるアクティブ・ラーニング）を追究し続けている。平成28年度から平成31年度にかけては、共通研究主題を「深い学びを引き出し、これからの時代に求められる資質・能力を育むカリキュラム・デザイン」とし、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」（以下、新学習指導要領）において育成を目指す資質・能力を育むための単元構成及び授業構成の在り方に研究の焦点を当て、各教科を中心にカリキュラム・デザインを追究した。また、平成31年度よりSDGsを意識したテーマや多様な専門・関係機関（以下、マルチステークホルダー）との連携を生かした総合的な学習の時間のカリキュラム開発にも着手し、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒の育成を図っている。

そこで、蓄積された教科教育の知見と、SDGs（国連 持続可能な開発目標※）を意識した各教科等や「総合的な学習の時間」の取組を生かして、カリキュラム・マネジメントを進め、社会に開かれた教育課程を通して、新学習指導要領において育成を目指す「学びに向かう力・人間性等」の伸長を図りたいと考えた。

※ 持続可能な社会を目指す上での国際目標として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された「持続可能な開発目標（SDGs）」。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っている。

### 2 共通研究主題の解説

本研究は、生徒に資質・能力を育むために、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質を高める実践研究（効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究）である。本校の教育目標「自主自律 豊かな心で たくましく」のもと、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ、SDGsを意識した横断的・総合的な学習活動や探究活動を系統的につなげるカリキュラム開発を通して、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒の育成を目指している。

#### (1) 「学びの意義」とは

「学び」とは「既知の世界から未知の世界への旅」であり、人は「学び」において、対象世界・他者・自己との出会いと対話を三位一体に遂行している（佐藤，1999）。

その営みを「意義」に着目して整理すると、

- ア. 本質的意義（人間が人間として発達し、人間の本質を実現する）
- イ. 社会的・客観的意義（獲得した知識や教養を持続可能な社会づくりに生かす）
- ウ. 主観的意義（自己の意欲やキャリアの実現など豊かな生き方とする）

に整理できると考えた。そして、これからの時代・社会の変化のもとで求められる「持続可能な社会の創り手を育む」ことと、親和性が特に高いと思われる「イ. 社会的・客観的意義」に焦点を当てることとした。

中央教育審議会「初等中等教育分科会 教育課程部会教育課程企画特別部会 論点整理」では、これからの教育課程には「社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく『社会に開かれた教育課程』」としての役割が期待されるとして、次の点を重要視していた；

1. 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
2. これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んで

いくこと。

3. 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

これをふまえて、新学習指導要領前文に「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」(傍線筆者)と明記された。

すなわち、本校が重視する学びの「社会的・客観的意義」に繋がる、「SDGs 達成を目指す ESD (= ESD for SDGs) の視点」による学習活動の組織的計画的な営みが望まれるのである。様々な事物・現象が実社会や実生活と関わっていること、広範囲の多くの要素が複雑に絡み合っていること、協働的な問題解決が必要であることなど、持続可能な社会づくりの構成概念を捉えながら、多様な機関との連携・協働による学習プログラムを通じた取組を推進するということである。

## (2) 「自ら学び続ける生徒」とは

新学習指導要領では、資質・能力を支える「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱の関係性が示されている(図1)。

本校のこれまでの研究では、「主体的な学習に取り組む生徒」を「学習課題に対して、自らその価値を自覚し、解決の計画や追求に協同的に根気強く取り組み、解決の評価を通して効力感や成就感を味わえる生徒」と位置づけ、「探究的な学習活動の過程と言語活動」や「生徒を学習の主体にさせる4段階のアプローチ」(学習課題の価値の自覚—学習課題の解決の計画化—学習課題の追求—学習課題の解決の評価)に基づく研究実践を積み重ねてきた。

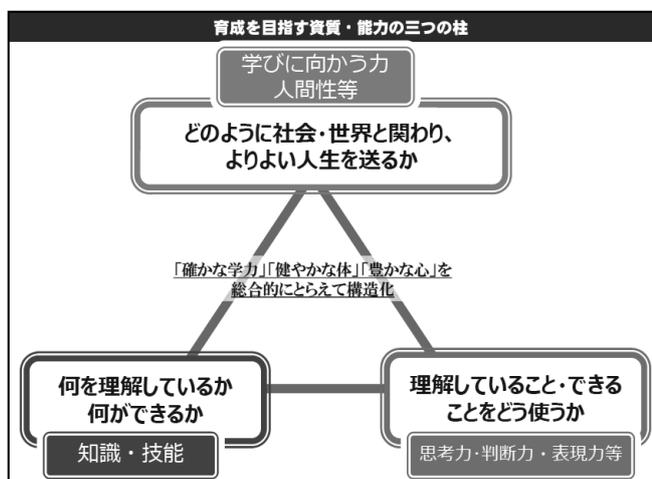


図1 資質・能力の三つの柱  
(「中教審答申 補足資料」より)

そこで、本研究では「自ら学び続ける生徒」を、育成を目指す資質・能力のうち、「学びに向かう力・人間性等」において、「感性や思いやり」と「主体的に学習に取り組む態度」の両面で高まっている生徒であるとし、前者は自己効力、耐性、決断力、共感・傾聴力、柔軟性などの「コンピテンシー(非認知スキル)」によって見取ることとした。また、後者は「学習評価の在り方ハンドブック」(国研)で示されている、「① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面」、「② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面を観点別評価から見取ることとした。

## 3 研究の概要

本校の学校教育目標「自主自律 豊かな心で たくましく」は、平成3年(1991年)に当時の教職員と生徒会の提案によりボトムアップで決まって以降約30年間、この目標からトップダウンで生徒の育成を目指してきた。しかし、変化の激しい予測不能な時代を迎えるで、改めて目の前の生徒像から目指すべき姿をボトムアップで再考する必要があると考えた(図2)。

- 学校教育目標と育成を目指す資質・能力の3つの柱(新学習指導要領)との関係は、主として、
- 「自主自律」・・・「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」
  - 「豊かな心で」・・・「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」
  - 「たくましく」・・・「生きて働く知識・技能の習得」

と整理できるが、資質・能力と本校教育目標は一対一の関係ではなく、有機的な結びつきであると考え、

本研究は、目指す生徒像を一体的に育む実践研究であると考えている。これまでの本校研究において、「知識・技能」については主に単元配列表をいかした授業づくり、

「思考・判断・表現」については主に探究的な学習や課題解決的な学習、言語活動の工夫などを通して取り組んできた。そこで、本研究では、「知識・技能」、「思考・判断・表現」の育成とともに、SDGsを意識した「学びに向かう力・人間性等」の伸長を中心とした、カリキュラム・マネジメントに取り組むことで、育成を目指す生徒像の具現化を図りたいと考えた。

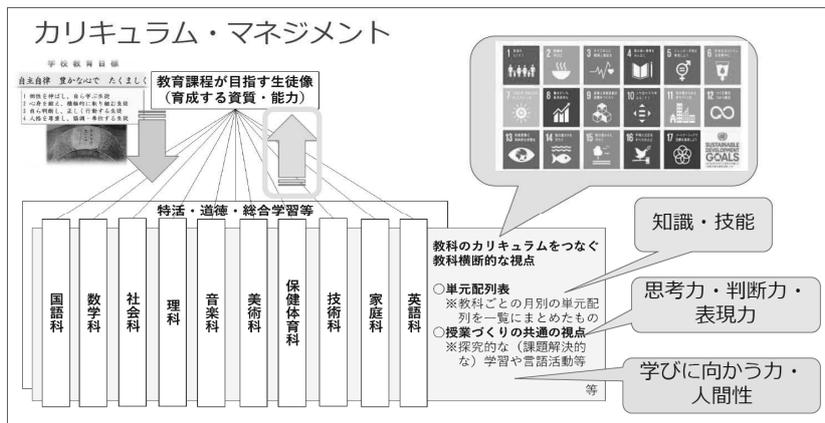


図2 本校のカリキュラム・マネジメント

教育目標の達成を目指すカリキュラムの編成について、新学習指導要領では「各学校において、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努めること」と記述されており、これを踏まえた効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究である。

(1) 前回研究との関連から

前回研究では、本校の現状と課題を踏まえ、各教科が育成する「学びに向かう力・人間性等」を明らかにすることに取り組んだ。各教科会と教員研修を通じて、「学びに向かう力・人間性等」の伸長を示す「生徒の姿」を具体的に描き出した。主に授業レベルの姿を「短期的評価項目」、単元の前後や生き方・将来に関わるレベルを「中長期的評価項目」として列挙し、各教科の共通項を整理し、目指す生徒像（「学びに向かう力・人間性等」に関する部分）の構成要素として明らかにした（図3）。上記の手続きを踏まえて作成した、本校の目指す生徒像に基づく、学びに向かう力・人間性等 の評価項目による自己評価は、本研究における内部評価指標として活用した（資料1）。

理念	非認知能力項目	短期的評価項目	中・長期的評価項目
「自主自律 附属中学校が 目指す生徒像 がたくましく」	「自主自律」 —自分を律し、自己への敬意を 持とう— ＜自制と敬意＞	自制系 授業に必要な基本的な姿勢や取 組みができているか 提示された課題を粘り強く追究で きているか 困難な課題に対して諦めずに解決 できているか	敬意系 学びにかかわる様々な「人・ものや こと・自分自身」を尊重できているか 共に学び合う他者に共感しながらお 互いの違いも含めて尊重できている か 新しい知識や異なった見識を拒む ことなく謙虚に学ぼうとしているか
	「豊かな心で」 —人とつながり、社会へ貢献しよう — ＜協働と貢献＞	協働系 自分の意見を相手に配慮しながら わかりやすく伝えられているか 相手の意見を積極的に聴き入れ違 いなどを理解できているか お互いを生かし合える役割を担い 共に課題解決ができているか	貢献系 学んできたことを活用して身近な課 題解決ができているか 自分が日常生活や地域社会のため に果たしたい役割を自覚できている か 学んできたことを踏まえてよりよい 社会のあり方を見通すことができ ているか
	「たくましく」 —意欲を持って、挑み続けてい こう— ＜意欲と挑戦＞	意欲系 自分の考えを整理し意欲として積極 的に表現できているか 自分で新しい課題を発見しさらなる 探究ができているか 学習した内容と自分や社会とのつな がりを見出せているか	挑戦系 学んできた内容を多面的な視点 を用いてさらに探究を深められて いるか 学んできた内容を実生活や社会の 中で活用できているか 学んできた内容をさらに新しい内容 や取り組みへと更新できているか

図3 本校の目指す生徒像に基づく評価項目

本校版 目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」の評価項目

- ア. 自制・敬意・・・学びにかかわる様々な「人・ものやこと・自分自身」を尊重し、謙虚に学ぼうとする力
- イ. 協働・貢献・・・学んできたことを活用して、日常生活や地域社会で身近な課題解決のために見通しをもって取り組むことのできる力
- ウ. 意欲・挑戦・・・学んだことで得られた知識や知見、思考や方法などをさらに身に付けていこう

としたり、深めようとしたりする力

これを踏まえて、今年度は各教科や総合的な学習の時間等、本校の教育活動全体を通した、生徒の非認知スキルの伸長を見取ることとした。

**(2) 研究計画**

本研究は平成28年度より取り組んだ前回研究の知見を引き継ぎながら、令和2年度から始まる2年研究であり、本年度は1年目である。

	実施時期	研究内容, 研究方法, 成果の公開等	期待される成果等
令和2年度	前期	<ul style="list-style-type: none"> <li>育成すべき資質・能力を検討し、それを測定するにふさわしい評価手法を選定する。</li> <li>プレイスメントテストの実施</li> <li>SDGsを意識した総合的な学習の時間のカリキュラムの改善・実施（全学年）</li> <li>「学びに向かう力・人間性等」を測定する評価指標の開発</li> <li>総合的な学習の時間の成果発表会の開催</li> <li>「学びに向かう力・人間性等」の測定</li> <li>生徒の自己評価アンケートの実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>初期状態のデータ収集</li> <li>3年間を見通した総合的な学習の時間のカリキュラム作成</li> <li>各種教育活動とSDGsとの関係の明確化</li> <li>「学びに向かう力・人間性等」を測定する評価指標の獲得</li> <li>生徒の資質・能力の伸長の確認、および、形成的評価による生徒の個性に応じた主体的な学びの促進</li> </ul>
	後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科, 総合的な学習, 道徳, 学校行事を関連付けたカリキュラム・マップの構想</li> <li>各教科教育実践発表会・学校ホームページ, PTA新聞や地域の公民館, リーフレット等による公立学校, 地域の公民館等に対する情報発信</li> <li>生徒の自己評価アンケートの実施</li> <li>ポートフォリオ評価の実施</li> <li>生徒の資質・能力の伸長度の測定</li> <li>一年次の研究成果の取りまとめ</li> <li>文部科学省（国立教育政策研究所）での研究協議会における中間発表</li> <li>教科, 総合的な学習, 道徳, 学校行事を関連付けたカリキュラム・マップの作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体カリキュラムの再構成</li> <li>教育実践発表会等における研究公開</li> <li>地域社会への取組内容に関する情報発信</li> <li>生徒の資質・能力の伸長の確認</li> <li>一年次の成果の確認と次年度以降の研究計画の再検討</li> </ul>
令和3年度	前期	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体カリキュラムの改善と実践</li> <li>教育研究発表会に向けた提案授業の実施</li> <li>総合的な学習の時間の成果発表会の開催</li> <li>「学びに向かう力・人間性等」の測定</li> <li>自己評価アンケートの実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラムの完成</li> <li>各教科のカリキュラム改善状況の確認</li> <li>研究テーマに基づく実践紹介</li> <li>生徒の資質・能力の伸長の確認及びフィードバック</li> </ul>
	後期	<ul style="list-style-type: none"> <li>第36回中学校教育研究発表会での発表</li> <li>生徒の自己評価アンケートの実施</li> <li>ポートフォリオ評価の実施</li> <li>生徒の資質・能力の伸長度の測定</li> <li>研究結果の検証と結果の取りまとめ。</li> <li>文部科学省（国立教育政策研究所）による最終報告会における研究成果発表</li> <li>学校ホームページ, リーフレット等による研究成果の情報発信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の中間的成果の確認と公開・生徒の資質・能力の伸長の確認</li> <li>研究成果の取りまとめ</li> <li>研究成果の公開</li> <li>地域社会への研究成果の還元</li> </ul>

**(3) 研究の具体**

① 目指す生徒像を共有した教員組織, 実践研究体制の確立

本研究主題について取り組むに当たっては、各教科研究との両立や関連性、整合性をもたせることが重要であると考えた。そこで、本校研究主題に取り組むうえで、各教科研究において特に重視する「研究の手立て（主たる指導区分）」及び「SDGsの視点」（特にSDGsの視点が関連付けられているもの）について、最重点項目を◎、重点項目を○として示し、共有した（表1）。研究主題を基に、各教科等における研究課題をそれぞれ設定し、育成すべき資質・能力を明確にし、それを効果的に育成

するためのカリキュラムを立案・実施・省察・改善する取り組みを行っている。その分析・検証にあたっては、独自の検証問題やパフォーマンス課題を活用したり、各教科で作成した「目指す生徒像に基づく自己評価」を実施したりすることとした。詳細は本研究紀要（教科編）に記載している。

各教科等における重点項目		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術	家庭	英語	総合
(1) 研究の手立て	ア 単元構成	◎		◎	○		○	◎		○		◎
	イ 指導方法	○	○			◎			◎			
	ウ 学習活動		◎	○	◎	○	◎	○	○	◎	○	○
	エ 振り返り・評価										◎	
(2) SDGsの視点	ア 教科の見方・考え方			○			○		○	◎		○
	イ 学習内容		◎							○	◎	○
	ウ 資質・能力	○			◎	○		○				○
	エ 外部・専門機関との連携/協働										○	◎

表 1 各教科研究の重点項目

②教科横断的なカリキュラムの単元レベルでの構築を目指した基盤整備

SDGsを意識した総合的な学習の時間について、3年間の見通しをもって、教科等とのつながりを生かした探究的学習活動の質の向上を図るカリキュラム開発を行った。つながりを可視化し、教科横断型の学習を推進するために、教科会や教科横断的な会議を行い、総合的な学習の時間を中段とした「学びのカレンダー」を作成した。総合的な学習の時間（ER）における全学年及び学年毎に「学びのカレンダー」を検討・作成した。

③総合的な学習の時間と各教科を両輪として、コンピテンシー育成を目指す学習活動の推進

総合的な学習の時間について、SDGsとの関連や多様な関係機関との連携を生かしたプロジェクト型学習を発展・充実させるために、各単元学習プログラムに同心円状の「カリキュラム・マップ」を作成し、その質の向上と組織的、計画的な実施を図った。また、単元学習プログラムにおけるESD for SDGsの視点や生徒につけたい力、評価規準を明確にするために、単元計画表を整理した。さらに、ESDで育みたい資質・能力に基づく独自の自己評価も実施した。これらはSDGsを意識した総合的な学習の時間の各学年単元プログラムをPDCAで評価・改善しながら行うカリキュラム開発と位置付けている。なお、②③の詳細は本研究紀要（総合的な学習の時間編）に記載している。

④「学びに向かう力・人間性等」を測定する評価指標の検討と実施

前述3(1)で述べた本校が目指す「学びに向かう力・人間性等」について評価項目を設定し、それらの伸長を測る評価手法を開発・実践した。ひとつが前述の「本校の目指す生徒像に基づいた 学びに向かう力・人間性等 の評価項目」による自己評価である。もうひとつは、外部評価指標「Ai GROW」の活用である。「Ai GROW」は、潜在的な性格診断（IAT）及び能力評価（自己評価と3名以上からの他者評価による。他者評価では、Aiの補正により評価バイアスが極小化される）から成る。そこで、本校版目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」の評価項目とAi GROWで可視化できるコンピテンシーの関連性を位置付けることとした（図4）。そして、内部および外部の評価指標による多元的評価を中心に、本校の教育目標、教育課程、そして授業をより効果的に繋ぎ、評価・改善するための、カリキュラム・マネジメントを目指している。

可視化された「コンピテンシー（非認知スキル）」については、振り返りや指導・助言を通して、生徒が実生活や実社会と関連付けた上で、協働的な問題解決を通して、省察・改善できるようにした。

⑤取組の根拠づけや発信の機会を確保

全体共通研究と各教科研究の関係性についての共通理解をもち、現代的課題に関わる教員研修を通して、SDGs達成につながるESD の視点を再確認し、研究を推進する学校組織風土の醸成を促進した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインやハイブリッド（オンラインと対面を合わせたやり方）による教育実践発表会を通して、各教科・総合的な学習の時間の取組を公開した。

⑥学校間ネットワークでの研究推進により成果の共有と向上を目指す。

岡山市内公立中学校との連携協働プロジェクト（テーマ：環境・防災・人権など）に取り組んだ。地域との密接なつながりを有する公立学校に対して、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメントについて発信した。

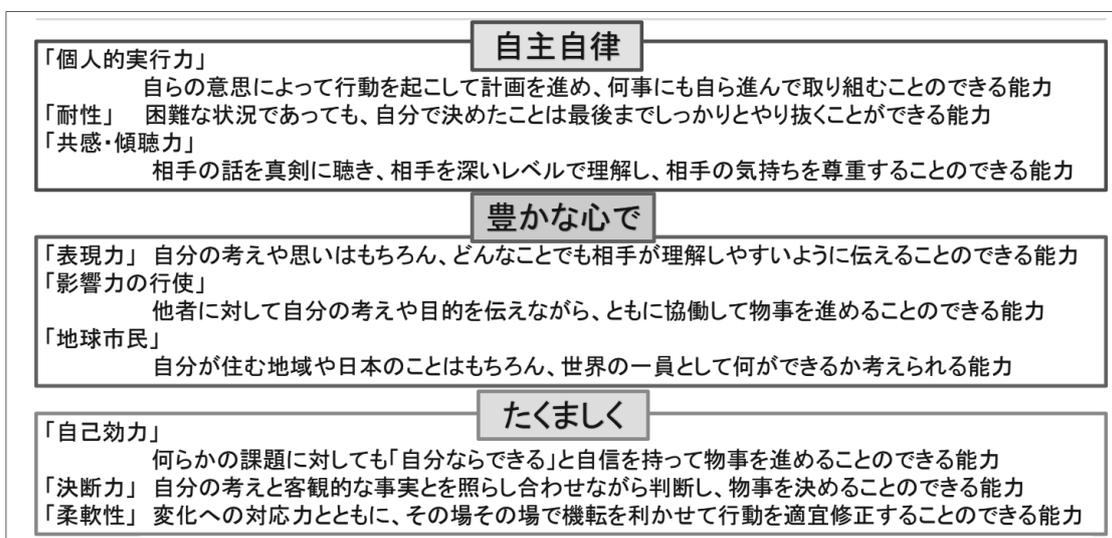


図4 本校の目指す生徒像と Ai GROW で可視化するコンピテンシーの詳細

#### (4) 成果と今後の取り組み

前記(3)に対応させながら、本年度の研究成果を挙げる；

- ① 共通研究主題に基づく研究推進によって、各教科研究計画書を作成し、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた、目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」を育成する研究を行うことができた。
- ② SDGsを意識した総合的な学習の時間の「学びのカレンダー」と「カリキュラム・マップ」を作成し、単元学習プログラムを組織的・計画的にPDCAで実施する基盤が整った。また、探究プロセスの可視化・重点化によって、生徒は課題を設定しやすくなり、教員は生徒自身が進める探究活動を支援するという役割を今までより認識できるようになった。学校評価アンケートでは、本校の「SDGs関連学習」への積極的な取り組みに対して、肯定的な割合は生徒97.1%、保護者97.6%であった。
- ③ 総合的な学習の時間の単元学習プログラムの本校版自己評価では、全学年で「関心・意欲」に関わる項目が高かった。特に、3年生では新カリキュラム構想を本校入学時から先導的に計画・実施し、個人テーマ探究活動にも取り組んだ結果、全項目で最高値を示した。
- ④ 本校で育成を目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」の自己評価と、新たに採用した外部評価指標「Ai GROW」の計測コンピテンシーを用いることで、生徒の資質・能力の伸長を可視化することができた。これらによって、生徒自身が今後の生活・行動目標を言語化したり、地域や家庭など学校外でも意識したりすることが進んだ。前期の自己評価を見ると、ア（自制・敬意）の肯定的な割合は95%前後と高かったが、イ（協働と貢献）とウ（意欲と挑戦）はいずれも74%で、実生活や実社会との接点や活用を促す取り組みのさらなる工夫が必要であることを示していた。そこで、各教科及び総合的な学習の時間において、探究的・課題解決的な学習活動を引き続き重視するとともに、身に付けたい力や伸ばしたい力をより明確にするようにした。その結果、後期はア（自制・敬意）の肯定的な割合がさらに上昇し、イ（協働と貢献）とウ（意欲と挑戦）はいずれも80～90%台へと上昇した。「Ai GROW」における各学年及び全校における計測結果からは、本校の教育活動を通じて、多くの生徒が「学びに向かう力・人間性等」に関わるコンピテンシーを伸長させていることが分かった（資料2）。また、その記述回答からも総合的な学習の時間や各教科における探究的・課題解決的な学習活動が効果的であることがうかがえた。3年

生ではER（探究）個人テーマ探究活動を実施する前後で、「創造性」の中央値が7ポイント、「影響力の行使」の中央値が6ポイント、「地球市民」の中央値が5ポイント上昇した。特に「創造性」については、67名が10ポイント以上（内22名は20ポイント以上）の大きな伸長が見られた。2月の第4回実施（最終回）までの間、本校全体の傾向として、目指す生徒像の「自主自律」「豊かな心で」「たくましく」のそれぞれに関連付けたコンピテンシーの伸長が自己評価と相互評価の双方において見られたことは、本研究主題に基づくカリキュラム・マネジメントによる効果ではないかと考える。

- ⑤学校評価アンケート（教員対象）における「学ぶのにふさわしい学校」の肯定的な割合は100%、「意欲的・積極的な学習」は96.7%、「理解しやすく主体的な学習」は100%、「成長の適切な評価」は96.7%となり、研究を推進する学校組織風土が醸成されつつある。
- ⑥社会課題に関わる同一テーマに岡山市内4中学校と取り組んだこと、総合的な学習の時間のオンライン成果発表会に隣接3高校が参加したことは、生徒の探究活動を通して市民への広報・啓発を行う機会となった。また、地域との連携によって、行政が町づくりの施策を進めることにつながった。

次に、上記の成果に対する課題及び今後の取り組みについて述べる；

- ①「学びの意義を理解し自ら学び続ける」「SDGsを意識した学びに向かう力・人間性等」の視点を更に明確にし、効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究を行い、本校が目指す生徒像「自主自律 豊かな心で たくましく」を具現化した「生徒像・リーダー像」について、認知及び非認知の両側面から評価を行う。
- ②SDGsを意識した総合的な学習の時間の「学びのカレンダー」と「カリキュラム・マップ」を活用し、単元学習プログラムが生徒の「SDGsを意識した学びに向かう力・人間性等」を更に育成するものとなるようPDCAを継続する。
- ③持続可能な社会の構築に資する資質・能力としての「持続可能性キー・コンピテンシー」（UNESCO, 2017）と「学習指導におけるESDの枠組み」（国研, 2012）の関連を整理する。
- ④可視化されたコンピテンシー（非認知スキル）について、生徒一人一人が自らの学びを省察し改善できるような手立ての工夫を行う。
- ⑤研究主題に対して必要な研修を把握し、選択幅のあるテーマで実施したい。
- ⑥引き続き、積極的に地域や公立校への発信や連携を働きかけたい。

研究2年目となる来年度は、「学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント」における多元的評価として、本校版「目指す生徒像に基づく学びに向かう力・人間性等」（自己評価）、外部評価指標「Ai GROW」（IGS社）によるコンピテンシー計測（自己・他者評価）、各教科研究の検証問題および評価シート（自己評価）、総合的な学習の時間「ESDで育みたい能力・態度」評価シート（自己評価）を継続することで、指導と評価の一体化を図るとともに、教科横断的・総合的な学習プログラムの実施・改善を進めたいと考えている。その上で、第36回中学校教育研究発表会や文部科学省（国立教育政策研究所）最終報告会における研究成果発表を通して、全体共通研究および各教科研究の取組を広く発信していきたいと考えている。そして、カリキュラム・マネジメントの3側面（教科等横断的な視点・実施状況の評価と改善・人的物的な体制の確保とその改善）から、学校全体で「目指す生徒像」の実現のための取組を検証したいと考えている。

#### 4 各教科の研究主題

共通研究主題との関連を踏まえ、各教科が推進している研究主題を以下に示す。

国語	他者との協働を通じて自らの考えを広げ深める生徒の育成 —批判的思考と創造的思考の往還を促すカリキュラム・デザイン—
社会	他者と協働する活動を通して、よりよい社会を築こうとする生徒の育成
数学	事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、 問題を自立的、協働的に解決することができる生徒の育成

理科	自然の事物・現象の中に問題を見だし、 理科の見方・考え方を活用して課題を解決することができる生徒の育成
音楽	創造性を基盤とする音楽の学びを追求する生徒の育成
美術	創造活動を通して、環境や社会から価値を見つけ獲得できる生徒の育成
保健体育	社会情緒的コンピテンスの向上に着目したカリキュラム・マネジメント
技術	技術の見方・考え方を働かせ、主体的に身の回りの問題を発見し、 課題解決に取り組もうとする生徒の育成
家庭	SDGs を意識し、持続可能な社会の構築の視点で意思決定できる生徒の育成 —「多様なライフスタイル」を鍵概念とした中学校技術・家庭（家庭分野）の A 家族・家庭領域におけるカリキュラム作成の工夫を通して—
英語	生涯にわたり自ら学び続ける自律した学習者の育成 ～ 生徒自身が PDCA サイクルを意識する単元・授業構成の改善 ～

### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）』
- 2) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領（平成 29 告示）解説 総則編』
- 3) 文部科学省(2016)『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 4) 中央教育審議会(2015) 初等中等教育分科会 教育課程部会教育課程企画特別部会 論点整理
- 5) 国立教育政策研究所(2020)『学校における教育課程編成に関する実証的研究 報告書 1』
- 6) 国立教育政策研究所(2020)『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料』
- 7) 国立教育政策研究所(2019)『学習評価の在り方ハンドブック』（小・中学校編）
- 8) 岡山大学(2019)『令和元年度日本教育大学協会研究集会発表概要集』
- 9) 学校法人先端教育機構出版部(2020)『月刊先端教育 2020.8 月号特集』「SDGs 教育の真価」
- 10) 中山芳一(2020)『家庭，学校，職場で生かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』
- 11) 国連教育科学文化機関（ユネスコ）著／藤井浩樹・柴川弘子・大安喜一 翻訳(2020)『持続可能な開発目標のための教育—学習目標—』
- 12) Institution for a Global Society Corporation(2020)『Ai GROW —3800 万件を超える評価データを基に生徒の資質・能力と教育活動の教育効果を可視化—』
- 13) 大根田頼尚(2019)『中央公論 2019.5 月号』「埼玉県の学力調査はなぜ世界から注目されるのか？」
- 14) 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校編(2019)『「深い学び」へと導く授業事例集』
- 15) 佐藤真久・岡本弥彦(2015)「国立教育政策研究所により ESD 枠組の機能と役割—『持続可能性キー・コンピテンシー』の先行研究レビュー・分類化研究に基づいて—」
- 16) 伊藤崇達(2008)『「自ら学ぶ力」を育てる方略—自己調整学習の観点から—』
- 17) 佐藤学(1999)『学びの快樂—ダイアログへ』
- 18) 岡山大学教育学部附属中学校(1992)『研究紀要第 21 号』
- 19) 岡山大学教育学部附属中学校(2010)『研究紀要第 45 号』
- 20) 岡山大学教育学部附属中学校(2017)『研究紀要第 53 号』
- 21) 岡山大学教育学部附属中学校(2018)『研究紀要第 54 号』
- 22) 岡山大学教育学部附属中学校(2019)『研究紀要第 55 号』

### 謝辞

本研究の全体編では、

国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究開発部	教育課程調査官	遠山 一郎 先生
中国学園大学・中国短期大学	副学長	住野 好久 先生
岡山理科大学教育推進機構 教職支援センター長	教授	岡本 弥彦 先生
岡山大学大学院教育学研究科	教授	川田 力 先生
岡山大学全学教育・学生支援機構	准教授	中山 芳一 先生

にご指導・ご助言を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

資料1 「自主自律 豊かな心で たくましく」自己評価シート

「自主自律 豊かな心で たくましく」自己評価シート

( )年( )組( )番 氏名( )

※「学んできたこと」：学習内容やものの見方・考え方、態度などをすべて含みます。

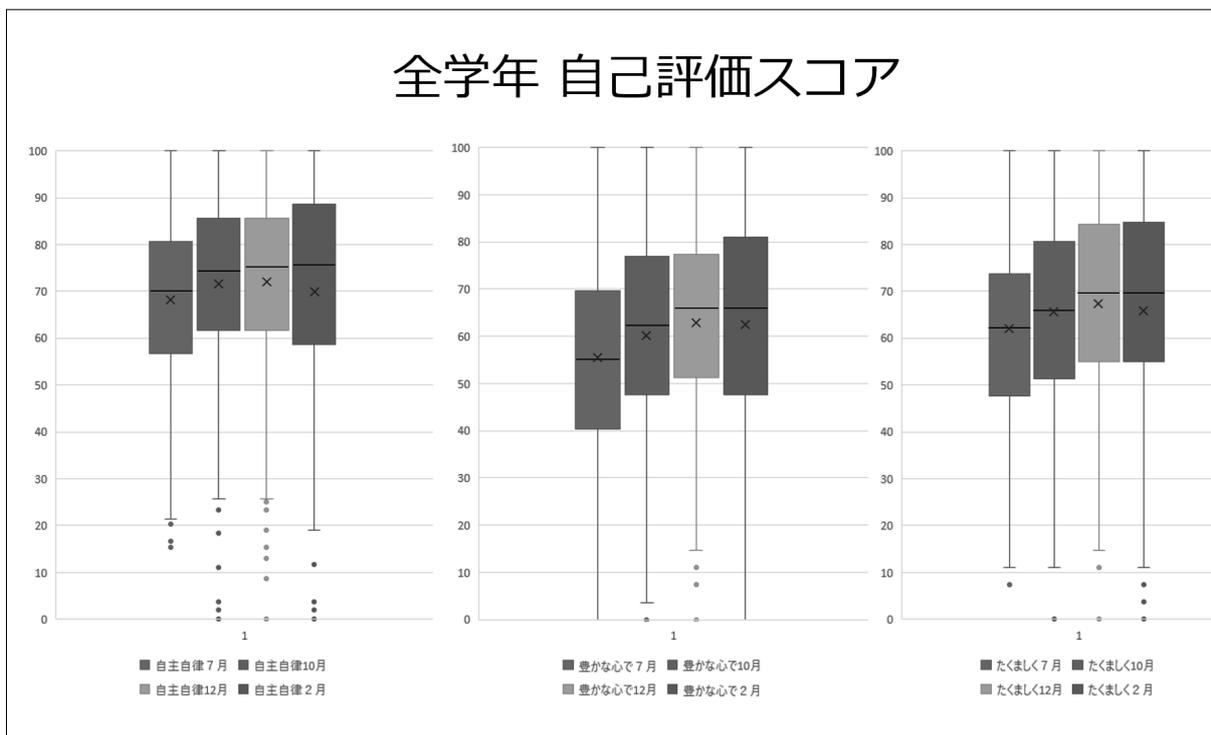
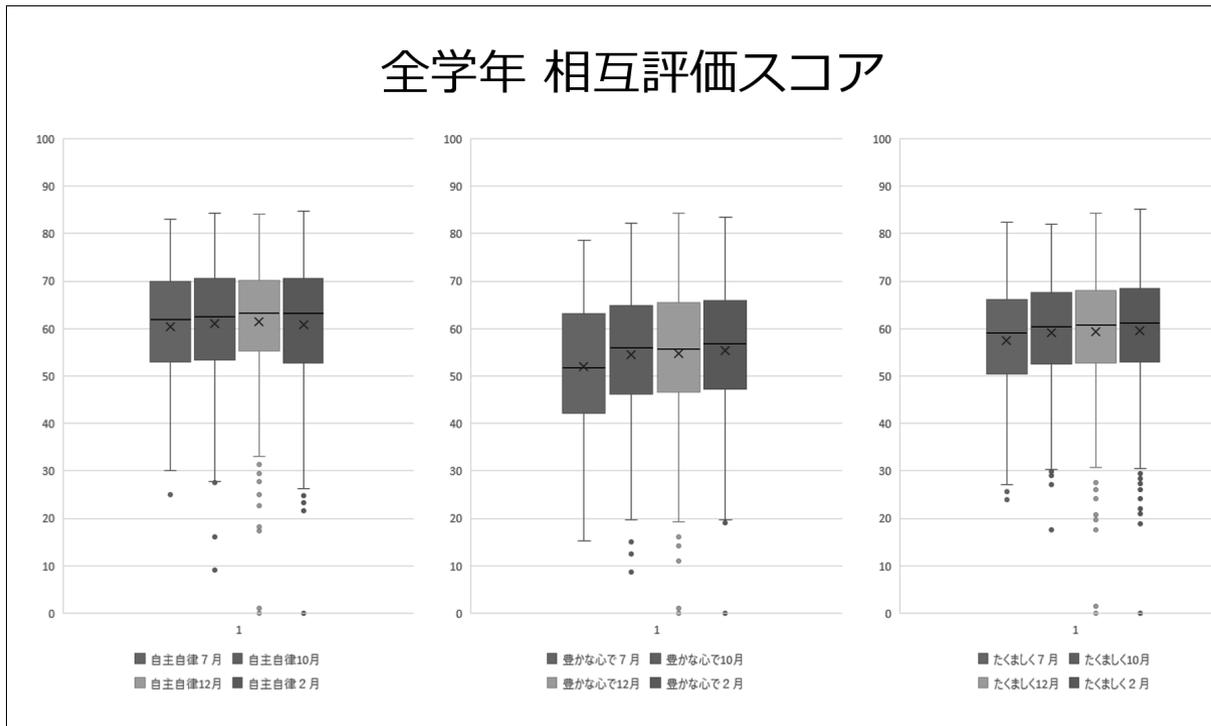
【5大変あてはまる 4まああてはまる 3いずれでもない 2あまりあてはまらない 1全くあてはまらない】

- (1) 学びの中にかかわる様々な人やもの・こと、さらに自分自身も大切な存在だと思えることができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (2) 共に学び合う他者の考えなどに共感するとともに、お互いの考えなどに違いがあっても、その違いも含めて尊重することができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (3) 新しい知識や異なった考え方を拒むことなく、謙虚な姿勢で学ぶことができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (4) 学んできたことを活かして、身近にある様々な課題を解決することができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (5) 自分が身のまわりや地域社会のために果たしたい(果たすべき)役割を自覚することができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (6) 学んできたことをふまえながら、持続可能な社会のあり方を見通すことができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (7) 学んできたことについて、より多面的な視点を用いながら、さらに探究を深めることができる。  
( 5・4・3・2・1 )
- (8) 学んできたことを日常の実生活や地域社会の中で活用している。  
( 5・4・3・2・1 )
- (9) 学んできたことをそのままにすることなく、さらに新しい内容や取組みへと更新(発展)させることができる。  
( 5・4・3・2・1 )

■記述回答欄

上記のうち、特に自身ができていると思うものを1つずつ選び、どんな場面で・どんな点についてそう思うのかを、具体的に書きましょう。

- (1)～(3)のうちでひとつ  
( ) \_\_\_\_\_
- (4)～(6)のうちでひとつ  
( ) \_\_\_\_\_
- (7)～(9)のうちでひとつ  
( ) \_\_\_\_\_



※縦軸は、本校教育目標（目指す生徒像）に関連付けた3コンピテンシーの合計スコア（最高値 300 を 100 に圧縮）を示し、「自主自律」「豊かな心で」「たくましく」の3要素／実施月ごとにグラフ化している。

※箱の中は、全校生徒の 25%-75%を意味しており、いずれもおおむね中央値（箱の中の—），平均値（箱の中の×）が上がっていること、箱の底上げ＝中間層の伸長が見られる。